書評

林英德著

『《文選》與唐人詩歌創作』

富永一登
廣島大學

本書は、著者の二〇〇六年の博士學位論文《唐人詩與〈文選〉關係研究》が五年後に中國博士優秀論文として刊行されたものである。冒頭に、指導教師だった北京師範大學の李壯鷹教授の序文が付されている。目次は以下の通りである。

引言　〝新選學〟的一個新課題
第一節　傳統〝選學〟的溯源
第二節　〝新選學〟的形成與內涵
第三節　本書的研究方向
第一章　〝文選學〟背景下的唐人詩歌創作
第一節　唐代〝文選學〟的興起
一、唐代〝文選學〟的大致流度
二、唐初統治階層的文學思想與《文選》的流行
三、科舉考試與《文選》的盛行
第二節　《文選》對唐人詩歌創作的影響
第二章　《文選》與〝初唐四傑〟詩歌創作
第一節　從〝初唐四傑〟的詩學觀看其對《文選》的接受
第二節　〝初唐四傑〟詩歌與《文選》關係的文本分析
第三章　李白〝三擬《文選》〟探
第一節　研究概況
第二節　李白吟詠《文選》作家情況分析
一、李白對先秦作家的相關吟詠
二、李白對兩漢作家的相關吟詠
三、李白對魏著作家的相關吟詠
四、李白對南朝作家的相關吟詠

五、李白接受《文選》的自我選擇性
第三節　李詩與《文選》關係的文本分析
一、《古風》組詩的分析
二、樂府詩的分析
三、〝選體〟詩的分析
第四章　杜甫〝熟精《文選》理〟辨（上）
第一節　研究概況
第二節　從吟詠情況看杜甫的《文選》接受
一、《文選》作品的吟詠
二、《文選》作家的吟詠
第三節　杜甫取法《文選》的詩藝分析
一、杜詩證選句圖
二、語句分析
三、意象分析
第五章　杜甫〝熟精《文選》理〟辨（下）
第一節　杜甫〝選體〟詩分析
一、前人對杜詩〝選體〟的解讀
二、杜詩〝選體〟的文本分析
第二節　杜甫〝《文選》理〟新解
一、前人對杜甫〝熟精《文選》理〟的認識
二、杜甫〝熟精《文選》理〟的音旨
第六章《文選》與韓愈詩歌創作
第一節　研究概況
第二節　韓愈奇崛詩風與《選》賦
一、韓愈詩風中的〝陌生化語言〟
二、韓愈詩風中的〝以文爲詩〟
第三節　韓愈的《選》詩接受
一、韓愈對《文選》五言詩的學習
二、韓愈〝選體〟詩的創作
結語　唐代詩人《文選》接受的詩學意義
一、唐代詩歌的繁榮離不開魏晉六朝文學的鋪墊
二、《文選》接受是唐人學習魏晉六朝藝術的門戶
三、唐人接受《文選》與《文選》經典地位的確定
附　錄
附錄一　李詩證選
附錄二《杜詩證選》箋識

附録三　《韓詩證選》箋識

主要引用書目及參考文獻

跋

まず「引言」で、從來の「文選學」の展開と「新文選學」の課題を擧げ、本書の研究方向を示す。「新文選學」は、清水凱夫氏が提唱されたもの（『新文選學――『文選』の新研究――』、研文出版、一九九九年）で、許逸民氏が「新選學」創建の必要性を強調し、一九九〇年代から現在に至るまでの中國における文選學の隆盛をもたらした。著者が記載する清水氏の提起した「新文選學」の課題は、(1)傳統的「選學」に全く缺如していた『文選』の實像の究明、(2)先行文學理論の『文選』に對する影響關係の究明、(3)各時代の『文選』に對する受容・評價の變遷の究明、(4)傳統的「選學」において既に行われていたことの更なる充實、の四點である。また、兪紹初・許逸民兩氏が『文選學研究集成』序（『中外學者文選學論集』上、鄭州大學古籍所編、中華書局、一九九八年）の中で、提起した「新選學」八課題、(1)『文選』注釋學、(2)『文選』校勘學、(3)『文選』評論學、(4)『文選』索引學、(5)『文選』版本學、(6)『文選』文獻學、(7)『文選』編纂學、(8)『文選』文藝學、を「文選學」研究の新觀念として擧げる。

これらの課題は、ことさらに「新」を冠するまでもなく、從前から『文選』を研究する者がみな念頭に置いていたことである。ただ、文選學という言葉が持っていた因襲性を取り除くためには「新」が必要だったのかもしれないが、「新」の字に踊らされることなく、『文選』自體の丹念な讀みから様々な課題を解明すればそれでよいと思う。これは文選學以外の他の研究についても全く同様であろう。

著者は、清水氏の擧げた第三の課題に取り組むに當たり、李詳（一八五九―一九三一）の「杜詩證選」「韓詩證選」（『李審言文集』上、江蘇古籍出版社、一九八九年）を傳統「選學」に屬するものと位置づけ、一九九〇年代からの新たな研究を踏まえて、『文選』と唐詩の關係を研究するという。その研究方向として、(1)唐代詩人が『文選』を接受した原因の分析、(2)唐代詩人が『文選』を接受した具體的な狀況と

主要な特徴の研究、(3)唐代詩人の『文選』接受の意義の追究、の三點を擧げる。(1)では科擧試驗との關係を、(2)では初唐四傑・李白・杜甫・韓愈それぞれの詩歌創作と『文選』の關係を、(3)では唐代詩人における漢魏六朝文學の傳統の繼承と革新、および『文選』經典化の過程を探るという明確な展望を示す。以下、第一章が(1)に、第二章から第六章までが(2)に、結語が(3)に相當する。

第一章　「文選學」のもとでの唐人の詩歌創作

本章第一節では、まず隋・蕭該から陸善經注までの唐代の文選學の概略を述べる。五臣注が唐代における『文選』普及規模の擴大促進に積極的な役割を果たしたと述べるが、李善注にはあまり觸れられていないのが氣にかかる。知識人による詩歌の創作への影響を檢討するに當たっては、李善注の位置づけを明確にしておくことは避けられないはずである。杜甫と李善注の關係もそうであるし、著者自身も後に引く白居易「偶以拙詩數首寄呈裴少尹侍郎」で裴少尹の詩を稱贊して、「毛詩三百篇後得、文選六十卷中無」というように六十卷本の李善注『文選』が讀まれていた。やはり李善注の果たした役割に言及する必要があろう。

ついで太宗君臣の文學思想が『文選』流行に與えた影響と、武后の科擧改革（進士科の「以詩賦取士」）が『文選』の盛行を促進したことを述べ、前者を選學流行の「內在原因」、後者を「外因」とする。特に、太宗の「詠司馬彪續漢書」詩、『晉書』陸機傳論などをもとに、太宗のいう「雅思」「妙詞」と「文選序」の「沈思」「翰藻」との對照や陸機評價を論じたところは興味深い。

第二節では唐代の詩文に見られる『文選』に關する記述を博搜し、創作活動に對する『文選』の影響について、科擧のための學習という消極的側面と、創作活動に資するために學ぶという積極的的側面の兩面性がうかがえることを指摘する。その中で、興味を懷かせたのは、南宋・朱熹「跋病翁先生詩」（『朱文公文集』卷八四）の一文が引かれていることである。「李・杜・韓・柳、初亦皆學選詩者。然杜・韓變多、而柳・李變少。」という著者の引用の後に、朱熹は「變不可學、而不變可學。」と記している。これは、

『朱子語類』巻一四〇「論文下」に「李太白終始學選詩、所以好。杜子美詩好者、亦多是效選詩。漸放手、夔州諸詩則不然也。」とあるのと同じく、『文選』という傳統の型から逸脱しないことこそ大切だという朱熹の主張である。詩歌創作の規範として遵守するにせよ、そこからの脱却を試みるにせよ、『文選』が重要な型として認識されていたことを物語っている。と同時に、朱熹は何の根據も擧げてはいないが、唐代の詩人が『文選』をどのように接受していたのかという視點で唐詩を讀んでいたことがわかる。この後、著者がどのような具體的根據を提示して論證を進めるのかに大いに關心を懷かせる。

第二章　『文選』と初唐四傑の詩歌創作

第一節では、まず徐尚定「四傑詩歌藝術淵源考辨――兼析《昭明文選》與初唐詩風――」（『文獻』一九九三年第二期）等により、盧照鄰が曹憲に學んでいたこと（『舊唐書』盧照鄰傳）、王勃が李善や公孫羅のいた沛王（李賢）府に十年近くいたことなどから、「文選學」と接點があったという。ついで、四傑の詩學理想と主張（骨氣と剛健、審美と政教）が『文選』に選錄された詩文と基本的に符合すると述べる。

第二節では、四傑の詩歌題材と『文選』の詩歌分類の比較から繼承關係を概觀した上で、現存する王勃95首（『王子安集』巻三）、楊炯34首（『楊炯集』巻二）、盧照鄰98首（『盧照鄰集』巻二、三）、駱賓王133首（『駱臨海集』巻一至巻五）と『文選』詩句の關係を指摘する。これは根據となる重要な資料なので、參照の便を考慮して、以下に四傑それぞれの集の配列順に整理し直して列擧する。（　）内に整理の際に參照した書名を記し、「↑」の下に『文選』（胡刻本による）の巻數と作者・作品名を記した。〈　〉内は字の異同を示す。傍線部は著書の誤字を改めた箇所である。

○王勃（『王子安集註』清・蔣清翊註、上海古籍出版社、一九九五年）

「倬彼我係」有鳥反哺、其聲嗷嗷↑19束晳「補亡詩・南陔」嗷嗷林鳥、受哺于子

「秋夜長」詩題・詩意↑29曹丕「雜詩・其一」漫漫秋夜長、

……斷絕我中腸

「臨高臺」復有青樓大道中、繡戶文窻雕綺櫳↑27曹植「美女篇」青樓臨大路、高門結重關

「送杜少府之任蜀州」海內存知己、天涯若比鄰↑24曹植「贈白馬王彪」丈夫志四海、萬里猶比鄰

「郊興」空園歌獨酌、春日賦閒居↑16潘岳「閑居賦」

「郊興」澤蘭侵小徑↑『楚辭』招魂／22謝靈運「遊南亭」澤蘭漸被徑

「春日還郊」還題平子賦、花樹滿春田↑15張衡「歸田賦」

「對酒（春園作）」攜酒對河梁↑29李陵「與蘇武・其三」攜手上河梁

「焦岸早行和陸四」侵星違旅館、乘月戒征儔↑27鮑照「還都道中作」侵星赴早路、畢景逐前儔

「三月曲水宴得煙字」彭澤官初去、河陽賦始傳。田園歸舊國、詩酒閒長筵↑45陶淵明「歸去來」／16潘岳「閑居賦」

「夜興」還將中散興、來偶步兵琴↑29嵇康「雜詩」興命公子、攜手同車／23阮籍「詠懷詩・其一」夜中不能寐、起坐彈鳴琴

「臨江・其一」泛泛東流水↑23劉楨「贈從弟・其一」汎汎東流水

飛飛北上塵↑27曹操「苦寒行」北上太行山、艱哉何巍巍

「贈李十四・其三」從來揚子宅、別有尚玄人↑21左思「詠史・其四」寂寂楊子宅、門無卿相輿

○楊炯（『盧照鄰集・楊炯集』徐明霞點校、中華書局、一九八〇年）

「有所思」少別比千年↑16江淹「別賦」暫遊萬里、少別千年

「和石侍御山莊」酌醴夢枯魚↑21應璩「百一詩」田家無所有、酌醴焚枯魚

「和崔司空傷姬人」昔時南浦別↑16江淹「別賦」送君南浦、傷如之何

鶴怨寶琴絃↑43孔稚珪「北山移文」蕙帳空兮夜鵠怨

「途中」鬱鬱園中柳←29「古詩十九首・其二」青青河畔草、
鬱鬱園中柳
亭亭山上松←23劉楨「贈從弟・其二」亭亭山上松、
瑟瑟谷中風

○盧照鄰（『盧照鄰集校注』李雲逸校注、中華書局、一九九八年）

「詠史・其四」直髮上衝冠、壯氣横三秋←22徐敬業「古意酬到長史溉登琅邪城詩」少年負壯氣、耿介立衝冠／43孔稚珪「北山移文」風情張日、霜氣横秋
名與日月懸、義與天壤儔←21張協「詠史」
清風激萬代、名與天壤俱

「早度分水嶺」斑鬢向長安←13潘岳「秋興賦」斑鬢髟以承弁兮、素髮颯以垂領

「三月曲水宴得樽字」高情邈不嗣←19謝靈運「述祖德詩」
高情屬天雲

「至望喜矚目言懷貽劍外知己」隱轔度深谷←10潘岳「西征賦」覓陛殿之餘基、裁岥岮以隱嶙
巖花濯露文←16江淹「別賦」露下地而騰文

「明月引」明月流光／高樓思婦、飛蓋君王←23曹植「七哀詩」明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀／20曹植「公讌詩」清夜遊西園、飛蓋相追隨、明月澄清景、列宿正參差

「懷仙引」休餘馬於幽谷、掛餘冠於夕陽←33屈原「九章・涉江」步餘馬兮山皋、邸餘車兮方林
曲復曲兮煙莊邃、行復行兮天路長←16江淹「別賦」怨復怨兮遠山曲、去復去兮長河湄

「江中望月」延照相思夕、千里共霑裳裾←13謝莊「月賦」
美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月

「送梓州高參軍還京」京洛風塵遠←24陸機「爲顧彥先贈婦其一」京洛多風塵、素衣化爲緇

「西使兼送孟學士南游」零雨悲王粲←23王粲「贈蔡子篤詩」翼翼飛鸞、載飛載東、我友云徂、言戾舊邦／風流雲散、一別如雨

「還赴蜀中貽示京邑游好」關山起夕霏←22謝靈運「石壁精

舍還湖中作」林壑斂暝色、雲霞收夕霏

「初夏日幽莊」風烟鳥路長↑26謝朓「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」風雲有鳥路、江漢限無梁

○駱賓王（『駱臨海集箋注』清・陳熙晉箋注、中華書局、一九七二年）

「望月有所思」如鏡寫珠胎↑8揚雄「羽獵賦」剖明月之珠胎

自繞南飛羽↑27曹操「短歌行」月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依

空忝北堂才↑30陸機「擬古詩・擬明月何皎皎」安寢北堂上、明月入我牖、照之有餘暉、攬之不盈手

「早發諸暨」征夫懷遠路↑29蘇武「詩・其四」征夫懷遠路（其三「征夫懷往路」）

「晚泊江鎭」四運移陰律↑22殷仲文「南州桓公九井作」四運雖鱗次［李善注］莊子黃帝曰、陰陽四時、運行各得其序。

轉蓬驚別渚〈緒〉↑29曹植「雜詩・其二」轉蓬離本根、飄颻隨長風

魂飛灞陵岸↑23王粲「七哀詩・其一」南登霸陵岸、迴首望長安

淚盡洞庭流〈秋〉↑32屈原「九歌・湘夫人」帝子降兮北渚、目眇眇兮愁予、嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下

「秋晨同淄川毛司馬秋九詠・秋蟬」噪柳異悲潘↑13潘岳「秋興賦」蟬嘒嘒而寒吟兮、鴈飄飄而南飛

「途中有懷」莫言無皓齒、時俗薄朱顏↑29曹植「雜詩・其四」時俗薄朱顏、誰爲發皓齒

「北眺春陵」詞殫獨撫膺↑28謝靈運「會吟行」辭殫意未已／陸機「梁甫吟」慷慨獨拊膺（『樂府詩集』卷四一）

「冬日宴」何須攀桂樹、逢此自留連↑33劉安「招隱士」攀援桂枝兮聊淹留

「浮槎〈查〉」徒懷萬乘器、誰爲一先容↑39鄒陽「獄中上書自明」蟠木根柢、輪囷離奇、而爲萬乘器者、何則、以左右先爲之容也

「賦得春雲處處生」非將吳會遠、飄蕩帝鄉情←29曹丕「雜詩・其二」吳會非我鄉、安能久留滯

「渡瓜步江」驚濤疑躍馬←34枚乘「七發」沌沌渾渾、狀如奔馬

不學浮雲影、他鄉空滯留←29曹丕「雜詩・其二」西北有浮雲、亭亭如車蓋、惜哉時不遇、適與飄風會、吹我東南行、南行至吳會、吳會非我鄉、安能久留滯

「陪潤州薛司空丹徒桂明府遊招隱寺」還依舊泉壑、應改昔雲霞←22謝靈運「石壁精舍還湖中作」林壑斂暝色、雲霞收夕霏

「月夜有懷簡諸同病〈寮〉」棲枝猶繞鵲（「望鄉夕泛」今夜南枝鵲、應無繞樹難）←27曹操「短歌行」月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依

可歎高樓婦、悲思杳難終←23曹植「七哀詩」明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀

「秋日送別」搖落歲時秋←33宋玉「九辯」悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰

「從軍行」平生一顧重←30謝朓「和王主簿怨情」生平一顧重

「晚度天山有懷京邑」坐憐衣帶賒←29「古詩十九首其一」衣帶日已緩

「在軍中贈先還知己」別後邊庭樹、相思幾度攀←29「古詩十九首・其九」庭中有奇樹、綠葉發華滋、攀條折其榮、將以遺所思

「從軍中行路難」棄置勿重陳←28劉琨「扶風歌」弃置勿重陳（※李善注にある29曹丕「雜詩其二」棄置勿復陳も指摘する必要がある。）

「蓬萊鎮」承冠泣二毛←13潘岳「秋興賦」斑鬢髟以承弁兮、素髮颯以垂領／「序」餘春秋三十有二、始見二毛

先に擧げた徐尙定論文では、初唐四傑における具體的な『文選』接受資料としては、「物色」を取り上げるのみであったのに對して、本書では以上のようなより多くの具體例が指摘されている。これによって四傑の『文選』接受の

實態解明を前進させたことは確かである。しかし、これで全てとは思えない。楊炯の擧例の後だけには「等等」とあるが、他はこれだけなのであろうか。王勃の詩九十五首中の十二首十三箇所では、それほど多いとは言えないし、駱賓王の「賦得白雲抱幽石」はなぜ取り上げないのか、よくわからない。著者も參考にしたであろう各人の詩集の注釋書や倪木興選注『初唐四傑詩選』（人民文學出版社、二〇〇一年）などを見れば、もっと多くの指摘が可能である。なぜ著者がこれだけの指摘に止めたのか選擇の基準を明確にしてほしかった。實は、このような指摘を行うにあたっては、この基準作りが重要なポイントとなり、最も惱ましい問題だからである。細かなことを言えば、王勃詩の配列順は不明（『全唐詩』卷五五・五六は『王子安集』と同じ）、楊炯詩は集（點校本は四部叢刊本『楊盈川集』と同じ）ではなく、『全唐詩』卷五〇の配列順、駱賓王詩も『全唐詩』卷七七～七九の配列順（四部叢刊本『駱賓王文集』や『駱臨海集箋注』とは異なる）、盧照鄰詩は「三月曲水宴得樽字」と「早度分水嶺」が前後入れ替わっているほかは集の配列順（點校本、四部叢刊本『幽憂子集』、『全唐詩』卷四一・四二ほぼ同じ）で、指摘も校注本に基づいている。字句の異同も關係してくるので、四傑、『文選』それぞれの底本を明記する必要があろう。また誤字が散見するのも殘念である。この作業は重要な根據となるものなので、緻密であることが望まれる。

ついで、駱賓王「帝京篇」が『文選』の京都賦とそれから派生した鮑照「蕪城賦」（分類は「遊覽」）、阮籍「詠懷詩」、左思「詠史詩」の影響を受けていること、盧照鄰「長安古意」が左思「詠史詩・其四」の影響を受けた作品であることを述べる。

第三章　李白「三擬『文選』」について

唐・段成式『酉陽雜俎』（前集卷一二「語資」）に、李白が三度『文選』作品の模擬を試み、氣に入らなかったので「恨賦」「別賦」だけを殘して、全て燒いたという話（白前後三擬詞選、不如意、悉焚之。唯留恨・別賦。）が記載されている。なお、江淹「恨賦」に模擬した「擬恨賦」が現存する。本章の題はこの話に基づく。

まず、先の朱熹の跋文、元・明・清の詩話、及び『李白全集校注匯釋集評』（百花文藝出版社、一九九六年）の詹鍈「前言」、松浦友久「李白研究的劃時代成果」（『古籍整理出版情況簡報』、一九九八年）、周勛初「李白〝三擬《文選》〟說闡微」（『鄭州大學學報』哲學社會科學版、二〇〇六年）などをもとに、『酉陽雜俎』の話は小說ではあるが、李白の『文選』接受の實態を反映したものであると述べ、從來の研究情況を概括する。その上で、李白の文學思想という觀點から、『文選』接受の要因と特徵の解明を試みる。第二節では、先秦から南朝までの作家作品との關係を時代別に考察し、第三節では、「古風」詩、樂府詩など詩體別の考察を行う。特筆すべきは、これらの分析の根據となるべき三十頁に及ぶ「李詩證選」（附錄一）が作成されていることである。李白が接受したと思われる屈原・宋玉から沈約・徐悱に至るまでの『文選』所收作品を列擧したものであり、「杜詩證選」「韓詩證選」を著した李詳の「文選學」の缺を補う新たな成果と言えよう。

先秦から南朝までの『文選』に收錄されている作者が、李白詩の中では以下のように取り上げられているという。

屈原の文學才華への敬慕と不幸への同情、宋玉の文才とりわけ「高唐賦」の巫山雲雨への稱贊が多く見られると指摘するが、『文選』接受の狀況という觀點からすれば、屈原・宋玉の『文選』所收作品と、それ以外の『楚辭』作品接受との比較も行う必要があろう。

兩漢の作者作品については次のように指摘する。賈誼への言及が最も多く、懷才不遇の人生に共鳴して李白が自らに喩えている。次に多い司馬相如に關しては、賦才に敬服する一方、賦を得意として功績にしていることに批判的である。揚雄について李白が最も關心を寄せていたのは、『太玄經』と獻賦である。枚乘の「七發」に習熟し、張衡「四愁詩」、禰衡「鸚鵡賦」に興味を持っていた。

魏晉の作家では、李白が詩の中で取り上げるのは特に陶淵明と阮籍であり、彼らの個性的氣質に對して強い關心を寄せていたと指摘し、『文選』が曹植・陸機の作品を多く採錄していることから、李白と蕭統の文學觀に差異があることがわかるという。しかし、李白が取り上げている詩人

のことだけから、結論を導き出すことはできない。著者自身が作成した「李詩證選」を見れば、多い順に曹植十六例、陸機十一例、左思九例、郭璞九例、張協八例、潘岳五例と續き、陶淵明と阮籍は三例である。これによれば、『文選』の採錄數と李白の引用數はほぼ一致している。『文選』接受を論じるのであれば、このことについて言及しなければならないであろう。

南朝については、二謝（謝靈運、謝朓）、顏鮑（顏延之、鮑照）に關心が集中していて、その四人を繰り返し詠じているという。これは、「李詩證選」の謝靈運三十例、謝朓十五例、鮑照十三例、江淹十一例、顏延之七例、謝惠連四例、任昉四例の順と符合する（江淹は「雜體詩」の引用が多く、對象となった各詩人への關心についても考慮が必要）。謝靈運は山水を好んだこと、謝朓は政治的境遇が李白と類似していて精神的に共鳴するものがあったのだという。

これらの分析を踏まえた上で、第二節の最後に、徐健順「論李白的文學思想及其歷史地位」（茆家培・李子龍主編『謝朓與李白研究』人民文學出版社、一九九五年）にある李白詩歌の王琦注引歷代詩人作品（語典）の引用回數と比較して、四點を結論とする。それは次のように要約できる。

1．「古風」其一に見られる「復古」文學の主張と詩に現れる歷代詩人の文學觀念の間に矛盾が存在するが、後者の方が李白の文學思想の眞相を反映したものである。

2．詩に取り上げた歷代詩人と詩語の引用回數の多少との不一致は、李白の評價が文才のみならず個性や生き樣にまで及んでいること、理論と創作實踐が完全には一致していないことを物語っている。

3．李白が詩に取り上げた歷代詩人は、『文選』作家の作品であり、李白の詩語は『文選』作家の作品を典據としていて、その大部分は『文選』の中に見いだせる。李白の『文選』接受は科擧を目的としたものではなく、彼の文學思想に基づくものであり、『文選』編者の文學觀と圖らずも一致している。

4．『文選』に採錄された作家百三十人の內、李白の詩

に取り上げられたのは三十人前後、詩歌創作の資源として利用されたのは六十人前後の作品に過ぎず、その數は杜甫とは比べものにならない。このことは、李白の『文選』接受が彼自身の個性による取捨選擇であり、主觀的傾向が突出していることを物語る。また、李白の『文選』接受は、杜甫のような自覺に基づく意識的なものではないといえる。

これらの結論は異を唱えるべきものではないが、李白が取り上げた先秦から南朝までの作家の特徴分析と、『文選』接受との關係が曖昧になっているのは殘念である。そもそも詩語の面での『文選』接受と、文學思想面での『文選』の影響を同一レベルで論じるのは無理なのではなかろうか。特に後者の方向から『文選』接受の實態に迫ることができるのであろうかという疑問も生じる。また、前者の方向から『文選』接受を論じるに際に最も有效に活用できると思われる著者自身が作成した「李詩證選」が活用されていないのはなぜなのであろうか。

第三節では、「古風」詩について先行研究を整理した上で、『文選』の傳統を基礎に創作されたものだとして、(1)「古詩十九首」を代表とする漢代古風を繼承、(2)『文選』の魏晉の詠史・遊仙・詠懷類の五言古體の影響の二點を指摘する。これは概ね著者の擧げる元・明・清の詩話や、「古風」詩の詩語の典據からも裏付けられる。因みに、著者の「李詩證選」で「古風」詩に引かれる『文選』作品の數は、「古詩十九首」六例、江淹「雜體詩」六例、郭璞「遊仙詩」五例、曹植作品四例などとなっている。また、李白の樂府詩における『文選』接受では、鮑照・陸機の作品が多く模擬されていて、李白が鮑照を推賞していたことと一致するという。これは著者自身も述べているように、先人の研究ですでに明らかにされていることである。

第四、五章　杜甫の「熟精せよ『文選』の理」を論じる

杜甫は、次男宗武の誕生日に際し、

詩是吾家事　　詩は是れ吾が家の事

人傳世上情　人は傳う世上の情
熟精文選理　熟精せよ文選の理
休覓彩衣輕　覓むるを休めよ彩衣の輕きを
（「宗武生日」）

と、『文選』に精通せよと言い、「水閣朝霽奉簡雲安嚴明府」（水閣の朝霽に雲安の嚴明府に簡し奉る）詩でも、

呼婢取酒壺　婢を呼びて酒壺を取らしめ
續兒誦文選　兒に續がしめて文選を誦せしむ

と、實際に子供に『文選』を暗誦させていた。

この二章では、「熟精せよ『文選』の理」と詠い、唐代詩人の中で『文選』を最も積極的に接受されたと言われている杜甫の詩と『文選』の關係について論じる。

まず、南宋・張戒『歲寒堂詩話』をはじめとする清までの詩話、李詳「杜詩證選」、金啓華「廣杜詩證選」（『杜甫詩論叢』上海古籍出版社、一九八五年）、吳懷東『杜甫與六朝詩歌關係研究』（安徽教育出版社、二〇〇二年）、韓泉欣「爲杜詩〝熟精《文選》理〟進一解」（『浙江大學學報』人文社會科學版、二〇〇三年）など近人の研究を整理し、杜甫の『文選』接受について、更に廣くかつ深く考察することの必要性を述べる。

第四章第二節では、杜甫が『文選』を直接に詠んだ詩（先の二つの詩）、『文選』所收の作品を詠んだ詩、『文選』所收の作家を詠んだ詩の三方面から個別の具體例を列擧しながら檢討する。その結果、杜詩には『文選』の詩・賦・文約三十篇が詠み込まれ、四十人餘の作家が取り上げられていることを指摘する。また、「屈宋」（屈原・宋玉）、賈誼、揚雄、司馬相如、李陵・蘇武、曹植（杜甫が尊崇し偶像視していたと指摘）、劉楨、王粲（特に「登樓賦」）、嵇康、阮籍、潘岳、陸機、顏鮑（顏延之・鮑照）、二謝（謝靈運・謝朓）、沈約、任昉等等、『文選』を代表する詩人たちの生涯、人となり、詩才、德操が多く詠じられていて、そこから杜甫の『文選』編者に近い文學史觀が見いだせるという。

第三節では、杜甫がどのように『文選』を接受したのか、その具體的な方法について語句と情趣の二方面から考察を行う。杜詩と屈原、宋玉、僞蘇武、僞李陵、「古詩十九首」、曹植、阮籍、嵇康、潘岳、陸機、鮑照、謝靈運、謝朓の詩

句を對照した十三表を作成して詳細な檢討がなされていて、本書の中で特筆すべき箇所である。

語句分析は、「用韻」「使字」「用句」の三點について分析する。中でも、「使字」「用句」の分析は興味深く、杜甫の「點鐵成金」「脱胎換骨」の方法をよく物語るものとなっている。例えば、「使字」の擧例を整理すると次のようである。

・波瀾　「敬贈鄭諫議十韻」毫髮無遺憾、波瀾獨老成
　↑卷一七、陸機「文賦」或沿波而討源、……或龍見而鳥瀾

・冥搜　「同諸公登慈恩寺塔」方知象教力、足可追冥搜
　「敬贈鄭諫議十韻」多病休儒服、冥搜信客旌
　「送韋十六評事充同谷防禦判官」論兵遠壑靜、亦可縱冥搜
　↑卷一一、孫綽「遊天臺山賦・序」非夫遠寄冥搜、……何肯遙想而存之

・掛（挂）席　「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士」掛席釣川漲
　「奉贈射洪李四丈」掛席窮海島
　↑卷一二、木華「海賦」維長綃、挂帆席。卷二三、謝靈運「遊赤石進帆海」挂席拾海月

・敦　「示從孫濟」勿受外嫌猜、同姓古所敦
　↑卷三七、曹植「求通親親表」誠骨肉之恩、爽而不離、親親之義、寔在敦固

・闌風伏雨　「秋雨歎三首・其二」闌風伏雨秋紛紛
　↑卷二六、謝靈運「永初三年七月十六日之郡初發都」述職期闌暑。卷二九、張協「雜詩十首・其十」階下伏泉涌

・活活　「九日寄岑參」所向泥活活
　↑卷二二、謝靈運「登石門最高頂」活活夕流駛

「用句」の擧例（曹植の句を改變したもの）。

「橋陵詩」好鳥鳴巖扃↑「公讌詩」好鳥鳴高枝
「北征」鵶鳥鳴黃桑↑「贈白馬王彪」鵶梟鳴衡扼
「留花門」原野轉蕭瑟↑「贈白馬王彪」原野何蕭條

「贈王二十四御契」置酒高林下↑「箜篌引」置酒高殿上
「到村」歸來散馬蹄↑「白馬篇」俯身散馬蹄
「遭田父泥飲（美嚴中丞）」名在飛騎籍↑「白馬篇」名編壯士籍

更に、『文選』の賦や散文の句（「散句」）を詩語（「韻語」）とした例を擧げる。

「對雪」急雪舞迴風↑「洛神賦」飄颻兮若流風之迴雪
「渼陂行」馮夷擊鼓群龍趨↑「洛神賦」馮夷鳴鼓
湘妃漢女出歌舞↑「洛神賦」從南湘之二妃、攜漢濱之游女
「（自京赴奉先縣）詠懷五百字」葵藿傾太陽、物性固難奪
↑「求通親親表」若葵藿之傾葉、太陽雖不爲之迴光、然終向之者、誠也
「覽鏡呈柏中丞」起晚堪從事↑卷四三、嵇康「與山巨源絶交書」臥喜晚起、……一不堪也

「使字」の例は、比較的初期の作品で『杜詩詳注』にも指摘されているものであるが、「用句」と「散句」を「韻語」とする例には、成都時期や夔州期の作もあり、『杜詩詳注』に指摘がないもの（「北征」、「贈王二十四御契」、「對雪」）もある。

「意象分析」では、屈原・宋玉、曹植、阮籍・嵇康、潘岳・陸機、鮑照、謝朓を取り上げる。屈原の「衆人皆醉我獨醒」と宋玉の「悲秋」、曹植の「轉蓬」、阮籍の「窮途」と嵇康の「龍性」、潘岳の「秋興賦」「閑居賦」（特に「養拙」）が杜甫に多大な影響を與えているが、陸機に對する情感は少ないという。中では、鮑照と謝朓に對する分析が興味深い。鮑照は庾信に次いで杜甫が關心を寄せていた詩人であり、賦の手法を使って詩を作り、古典的色彩の比興を採用し、自己の志や行いの高潔さを表現して、慷慨磊落の氣など、個人の複雜な心理體驗の美的な情趣をを充滿させたと言い、杜甫は、このような鮑照が創造した表現を大量に使用していると指摘する。例えば、

卷二八「代白頭吟」直如朱絲繩、清如玉壺冰の「直絲繩」「玉壺冰」の情趣

↓「送韋諷上閬州錄事參軍」喜見朱絲直、「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻」朱絲有斷弦、「椶拂子」擢擢朱絲蠅、「贈李十五丈別」正直朱絲弦

↓「贈特進汝陽王二十二韻」檐動玉壺冰、「湖中送敬十使君適廣陵」冰置玉壺多、「入奏行贈西山檢察使竇侍御」炯如一段清冰出萬壑、置在迎風寒露之玉壺、「槐葉冷淘」萬里露寒殿、開冰清玉壺

卷二七「還都道中作」騰沙鬱黃霧、翻浪揚白鷗の「白鷗」の情趣

↓「奉贈韋左丞丈二十二韻」白鷗沒浩蕩、「獨立」河閒雙白鷗、「雲山」白鷗元水宿、「遣意・其一」泛渚白鷗輕、「去蜀」殘生隨白鷗、「秋興八首・其六」錦纜牙檣起白鷗、「朝二首・其二」野靜白鷗來、「雨四首・其四」江晚白鷗飢、「旅夜書懷」天地一沙鷗

卷二八「東武吟」昔如韝上鷹

↓「贈韋左丞丈濟」老驥思千里、飢鷹待一呼

である。また、謝朓については、杜甫が『文選』卷二六「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」の「大江流日夜」を使って、「成都府」大江東流去、「旅夜書懷」月湧大江流、「別贊上人」百川日東流などと詠じている例を擧げる。そして、杜甫は謝朓の生涯にそれほどの思い入れはなく、謝朓の「吏隱」は杜甫の志向とは合わないと言い、「曲江對酒」詩の「吏情更覺滄洲遠、老大悲傷未拂衣」では、謝朓の「既懽懷祿情、復協滄州趣」（『文選』卷二七「之宣城出新林浦向版橋」）を逆の意で使用していることを指摘する（後句は『文選』卷一九、謝靈運「述祖德詩・其二」拂衣五湖裏を逆の意で使用）。

第五章では、詩話などで指摘される杜詩の漢魏體、鮑照體などの論と、「熟精『文選』理」の「理」の解釋について先人の見解を整理する。「熟精『文選』理」の意味については、次の三點にまとめる。

一、「文選序」と『文選』編目に具現されている蕭統などの編者の文學觀及び審美眼を指す。

二、杜甫が創作實踐の中で具現した『文選』作品に關する創作技巧、創作の法則を指し、それは形式、內容の兩面を含む。この場合、「理」の字は「法」「意」と相關關係にあり、それを內包する。

三、杜甫の子供の教育面での戒めであり、「理」の字は何も指さず、その意味を強いて解釋する必要はなく、當時の『文選』を讀むことを尊ぶ風氣を表す。

これらは、宋代以降近人に至るまでの議論を集約したものである。

本書の中では、この杜甫の『文選』接受が最も大きな比重を占め、考察も詳細であるが、以下の二つの點について、何も言及されていないのが殘念である。その一つは、かつて吉川幸次郎氏が指摘された『文選』李善注のことである。

いったい杜甫の詩は、「一字として來歷無きは無し」といわれますように、なにか歷史のある言葉を常に使いたがるのであり、中でもことに杜甫がしばしば語彙の源泉としますのは、「文選（もんぜん）」であります。「文選」三十卷は、漢魏六朝時代の詩文の權威的なアンソロジーであり、その內容となる五百篇ばかりの詩と文章は、いずれも極度の美文でありまして、讀みにくく暗誦しにくいものでありますが、杜甫はその全部を暗誦していたと見うけます。單に本文の全部を暗誦していたばかりではなく、「文選」の注釋としては、李善（りぜん）という人の書きました注釋が權威ですが、この李善のむすこの李邕（りよう）は、杜甫の若い頃の先生でありました。そうした關係も手つだって、杜甫は「文選」を、李善の注釋をもふくめて、あたかも囊中に物をさぐるごとく暗記していたと、推測してまちがいないと思う資料を、今日くわしくは申すひまがありませんが、私はもっております。そうしたことから、杜甫の詩の語彙は、もっともしばしば「文選」から出ます。またその語を使った「文選」の作品を想起することによって、杜甫の句ははじめて完全に理解されるという場合が、しばしばであります。（「杜甫の詩論と詩」――京都大學文學部最終

講義――、一九六七年二月一日口述、『吉川幸次郎全集』第十二巻、筑摩書房、一九六八年）

吉川氏の指摘以來、すでに五十年近くになるが、李善注との關係はまだ詳細には論じられていない。

もう一つは、先に擧げた朱熹の指摘である。これは、著者自身も第四章の「研究概況」の中で引用している。

杜子美詩好者、亦多是效選詩。漸放手、夔州諸詩則不然也。（『朱子語類』卷一四〇「論文下」）

杜甫の夔州時代の作品からは『文選』離れが見られるという。こちらは八〇〇年以上も前の指摘だが、いまだ解明されてはいない。杜詩と『文選』の關係を論じるにあたっては、この二つは避けて通れない課題であり、この點への言及があってはじめて研究の新たな展望が開けると思う。

第六章　『文選』と韓愈の詩歌創作

まず、宋代以降の詩話や韓愈詩の注釋を具體例を擧げながら檢討し、韓愈の詩歌と『文選』の關係が明らかであることを指摘し、近人の研究では李詳「韓詩證選」以外にこれに關する論述が少ないという。

次いで第二節で韓愈の奇拔な詩風と『文選』の賦作品との關係について考察する。清・沈德潛（『歸愚文鈔』卷一五「與陳恥庵書」）は韓愈の詩が漢賦に基づくと言い、夏敬觀「說韓」（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』上海古籍出版社、一九八四年）では韓愈の詩の駢字は司馬相如・揚雄から出るというが、漢賦だけではなく、魏晉、南朝の賦にも基づき、駢字だけではなく、用句、用意も司馬相如・揚雄から出ているので、『文選』の賦が韓愈の奇拔な詩風形成の主要な淵源であると指摘する。漢賦、魏晉南朝の賦に基づく例が多數記してあるが、ここでは、著者の示す魏晉南朝の賦との關係を示す數例を擧げる。

「和崔舍人詠月二十韻」赫奕當躔次←11何晏「景福殿賦」赫奕章灼、若日月之麗天也

「詠雪贈張籍」誤雞宵呃喔←9潘岳「射雉賦」良遊呃喔、引之規裏

興與酒陪鰓←9潘岳「射雉賦」敷藻翰之陪鰓〈徐爰注〉陪鰓、奮怒之貌也

「送靈師」靈師皇甫姓、胤胄本蟬聯←5左思「吳都賦」蟬聯陵丘〈劉逵注〉蟬聯、不絶貌

「岳陽樓別竇司直」喧聒鳴甕盎←12郭璞「江賦」千類萬聲、自相喧聒

「元和聖德詩」滌濯剗磢←12木華「海賦」飛澇相磢〈李善注〉郭璞方言注曰、澇、錯也。澇與磢同

「辛卯年雪」白帝盛羽衞、鬖髿振裳衣←12郭璞「江賦」綠苔鬖髿乎研上〈李善注〉通俗文曰、髮亂曰鬖髿

「憶昨行和張十一」並召賓客延鄒枚←13謝惠連「雪賦」召鄒生、延枚叟

「感春五首」已呼孺人戛鳴瑟、更遣稚子傳清杯←16江淹「恨賦」左對孺人、顧弄稚子

などの多數の具體例を擧げ、以下の二點を指摘する。

一、韓愈の『文選』の賦の接受は、廣範圍にわたっていて『文選』所收の賦作品の大部分に及んでいる。

二、賦の駢字難字を直接使用、句法を取る、句意を使うなど、『文選』の賦を詩歌に取り込む技法に多樣性がある。

多くの擧例によって韓愈の『文選』接受が廣範圍で多樣性のあるものであったことがよく分かる。ただ、引用された『文選』の作者名・作品名に誤記が散見するのは殘念である。

第三節では、韓愈の『文選』詩の接受について具體例を擧げて檢討し、韓愈が漢魏詩と鮑謝（鮑照・謝靈運）詩を重要視していたことを指摘する。また、『文選』の文からは何も取り入れていないのは、韓愈の主導した古文運動と關係があると述べる。

韓愈の『文選』接受についての論述は大變興味深い內容

を含んでいるが、欲を言えば、著者が引用している朱熹の「跋病翁先生詩」に記されている「韓變多」とはどういうことなのか、この點について言及してほしかった。それは「柳變少」とも關係があり、柳宗元の『文選』接受との比較が不可缺であろう。

最後に、唐代詩人の『文選』接受が、『文選』の中國古典文學史上の「文學經典」としての地位を確固たるものにしたこと、それは理論によってではなく、文學創作の具體的な實踐を通して行われたものであることを述べて結語とする。

以上、隨處にいささか勝手な意見を記し、欲張りにも思える課題を示したが、これもすべて「『文選』與唐人詩歌創作」という壯大なテーマに敢えて挑戰された著者への感嘆から發したものである。ご寛恕願いたい。

『文選』が中國古典文學の型になるにあたっては、唐初の「文選學」、中でも李善注が詩文創作に與えた影響、そして何より李白、杜甫などの詩文創作への實踐的な活用が大きく作用している。今回取り上げた林英德氏の著書は後者に對する研究への一歩を踏み出すものだと思う。更に、「文選學」全體には、進展させなければならない大きな課題がある。以下に一九九〇年代半ば頃からの『文選』關係著書（○研究書、□譯書・索引等、諸本集成、△研究書集成・舊著の影印・點校、※日本書）を記す。

○文選學論集（一九九二年選學國際學術研討會論文集）　趙福海主編　時代文藝出版社　一九九二年六月　［第一回の文選國際學術研討會の論文集は、一九八八年六月に吉林文史出版社から刊行された、趙福海・陳宏天・陳復興・王春茂・吳窮編『昭明文選研究論文集（首屆昭明文選國際學術研討會論文集）』である。］

○文選導讀　屈守元著　巴蜀書社　一九九三年九月

□昭明文選譯注（全五冊）　陳宏天・趙福海・陳復興主編　吉林文史出版社　一九八七年九月～一九九四年一一月

□文選全譯（全五冊）　張啓成・徐達等譯注　貴州人民出版社　一九九四年一一月

□昭明文選斠讀（上、下）　游志誠・徐正英著　駱駝出版社　一九九五年七月

○昭明文選學術論考　游志誠著　臺灣學生書局　一九九六年三

月

□文選詩部探析　王令樾著　國立編譯館　一九九六年七月

□新譯昭明文選（全四冊）　周啓成等注譯　三民書局　一九九七年四月

○文選學新論（一九九五年文選學國際學術研討會論文集）　中國文選學研究會・鄭州大學古籍整理研究所編　中州古籍出版社　一九九七年一〇月

○中外學者文選學論集（上、下）　鄭州大學古籍所編　中華書局　一九九八年八月

△清代文選學珍本叢刊（第一輯）　李之亮校點　中州古籍出版社　一九九八年一〇月　清・王煦「昭明文選李善注拾遺」、清・徐攀鳳「選注規李」、「選學糾何」の校點

□中外學者文選學論著索引　兪紹初・許逸民主編　中華書局　一九九八年一二月

○昭明文選研究　穆克宏　人民文學出版社　一九九八年一二月

○昭明文選　穆克宏著　春風文藝出版社　一九九九年一月

※文選李善注の研究　富永一登著　研文出版　一九九九年二月

※文選の研究　岡村繁　岩波書店　一九九九年四月

※新文選學――『文選』の新研究――　清水凱夫著　研文出版　一九九九年一〇月

○敦煌本《昭明文選》研究　羅國威著　黑龍江教育出版社　一九九九年一〇月

△文選旁證（上、下）　清・梁章鉅撰　穆克宏點校　福建人民出版社　二〇〇〇年一月

○昭明文選注析　王友懷・魏全瑞主編　三秦出版社　二〇〇〇年一月

○《昭明文選》研究　傅剛著　中國社會科學出版社　二〇〇〇年一月

○文選詩研究　胡大雷著　廣西師範大學出版社　二〇〇〇年四月

△昭明文選（全三冊）　韓放主校點　京華出版社　二〇〇〇年五月

○敦煌本《文選注》箋證　羅國威箋證　巴蜀書社　二〇〇〇年五月

敦煌吐魯番本文選　饒宗頤編　北京中華書局　二〇〇〇年五月

唐鈔本文選集註彙存（全三冊）　周勛初纂編　上海古籍出版社　二〇〇〇年七月　集注本の影印

○文選版本研究　傅剛著　北京大學出版社　二〇〇〇年九月

※『文選』陶淵明詩詳解　長谷川滋成著　溪水社　二〇〇〇年一〇月

○《昭明文選》與中國傳統文化――第四屆文選學國際學術研討會論文集　趙福海・劉琦・吳曉峰主編　吉林文史出版社　二〇〇一年六月

※沈思と翰藻――『文選』の研究――　小尾郊一著作選Ⅰ　研文出版　二〇〇一年九月

※日本國內に現存する文選古鈔本の原本調査に基づく文選訓讀についての總合的研究（平成9年度～平成12年度科學研究費基盤研究(C)(2)研究成果報告書）　研究代表者小助川貞次　二〇〇二年三月

○文選與文選學——第五屆文選學國際學術研討會論文集　中國文選學研究會編　學苑出版社　二〇〇三年五月

○文選版本論稿　范志新著　江西人民出版社　二〇〇三年九月

○現代『文選』學史　王立群著　中國社會科學出版社　二〇〇三年一〇月

文選（全三〇册）北京圖書館出版社　二〇〇四年二月　北京圖書館藏尤本の影印（中華再造善本）

※文選李善注語釋索引　山崎健司編　熊本縣立大學文學部研究叢書4　二〇〇四年三月

○文選學纂要　屈守元著　華正書局　二〇〇四年六月

□文選名篇　曹道衡・愈紹初・笪遠毅主編　江蘇人民出版社　二〇〇四年九月

△文選雙字類要（全二册）宋・蘇易簡撰　北京圖書館出版社　二〇〇四年一二月（中華再造善本）

○文選版本擷英　范志新著　貴州人民出版社　二〇〇四年一二月

○《文選》編輯及作品系年考證　韓暉　群言出版社　二〇〇五年一月

○《文選》成書研究　王立群著　商務印書館　二〇〇五年二月

○隋唐文選學研究　汪習波著　上海古籍出版社　二〇〇五年四月

○文選講讀　胡曉明著　華東師範大學出版社　二〇〇六年三月

△文選平點（重輯本　上、下）黃侃著　黃延祖重輯　中華書局　二〇〇六年五月

○《文選・賦》聯綿詞研究　郭瓏著　巴蜀書社　二〇〇六年八月

文選（全一四册）北京圖書館出版社　二〇〇六年八月　北京圖書館藏北宋殘卷本の影印（中華再造善本）

△文選箋證（上、下）清・胡紹煐撰　蔣立甫校點　黃山書社　二〇〇七年三月

○文選論叢　顧農著　廣陵書社　二〇〇七年九月

○中國文選學——第六屆文選學國際學術研討會論文集　中國文選學研究會・河南科技學院中文係編　學苑出版社　二〇〇七年九月

○《文選注》修辭訓詁研究　喬俊傑著　黑龍江人民出版社　二〇〇七年一〇月

○《昭明文選》研究發展史　王書才著　學習出版社　二〇〇八年二月

日本足利學校藏宋刊明州本六臣注文選　人民文學出版社　二〇〇八年三月

○明清文選學述評　王書才著　上海古籍出版社　二〇〇八年八月

○《文選》編纂研究　胡大雷著　廣西師範大學出版社　二〇〇九年四月
○李善文選學研究　趙昌智・顧農主編　廣陵書社　二〇〇九年四月
○《文選》編纂研究　胡大雷著　廣西師範大學出版社　二〇〇九年四月
○《文選》李善注與五臣注比較研究　陳延嘉著　吉林文史出版社　二〇〇九年七月
○文選綜合學　游志誠著　文史哲出版社　二〇一〇年四月
○宋代文選學研究　郭寶軍著　中國社會科學出版社　二〇一〇年九月
△文選學研究（全三册）　南江濤選編　國家圖書館出版社　二〇一〇年一一月　一九二三年から一九四九年までの『文選』關係論文の影印
○第八屆文選學國際學術研討會論文集　趙昌智・顧農主編　廣陵書社　二〇一〇年一二月
○『文選』李善注語言學研究　賀菊玲著　中國社會科學出版社　二〇一一年七月
○《文選》詮釋研究　馮淑靜著　中國社會科學出版社　二〇一一年八月
○錢鍾書文選學述評　陳延嘉　吉林文史出版社　二〇一一年八月
唐鈔本文選集註彙存（全三册）再版增補版　周勛初纂編　上海古籍出版社　二〇一一年八月（初版は二〇〇〇年七月）集注本の影印
△重訂文選集評（全三册）　清・于光華撰　國家圖書館出版社　二〇一二年一一月　影印本
○文選評點述略　王書才著　上海古籍出版社　二〇一二年一一月
○《文選》評點研究　趙俊玲著　上海古籍出版社　二〇一三年一月
○文選文研究　李乃龍著　廣西師範大學出版社　二〇一三年二月
○《文選》與唐人詩歌創作　林英德著　北京知識產權出版社　二〇一三年三月
△《文選》研究文獻輯刊（全六〇册）　宋志英・南江濤選編　國家圖書館出版社　二〇一三年四月　宋から清朝までの『文選』關係資料を影印
○文選顏鮑謝詩評補　黃稚荃著　林孔翼校　上海古籍出版社　二〇一三年六月
○《昭明文選》音注研究――以李善音注爲中心――　李華斌著　巴蜀書社　二〇一三年六月
○文選資料彙編賦類卷（上、下）　劉志偉主編　北京中華書局　二〇一三年八月

これを見れば、現在の『文選』研究情況は一覽でき、自ず

から見えてくる課題もあるであろう。一つの大きな課題は、注釋も含めた『文選』定本の作成である。古寫本を含めて數多くの『文選』諸本、研究書の集成がほとんど刊行され、『文選』所收作家の校注本も陸續と出版社されているので、その環境はほぼ整ってきた。定本が完成すれば、『文選』研究の全ての進展に大いに貢獻するだけでなく、中國古典文學全體の研究にも大いに資することは疑いない。もう一つは、當然ながら、『文選』所收作品自體の解釋である。日本では、この三十餘年間、新しい研究成果が盛り込まれた『文選』そのものの解釋の見直しはなされていないし、中國の現代語譯にも研究成果が反映されているとは言いがたい。これまた、中國古典文學研究の大きな課題である。

本稿は、獨立行政法人日本學術振興會科學研究費補助金基盤研究(B)「『文選』の傳承から見た文學言語の型の形成と繼承」（平成二三年度～平成二五年度）による研究成果の一部である。

（知識產權出版社、二〇一三年三月、四六三頁）